

## AI 活用消費

# 次々に萌芽した「ChatGPT」関連サービス キーワード別ヒット商品事例

人工知能（以下 AI）の研究は 1950 年代に端を発し、ブームと冬の時代を交互に繰り返しながら現在は「第 4 次ブーム」に入ったと言われている。その呼び水とも言えるのが「ChatGPT」の登場である。

ChatGPT は、OpenAI 社が 2022 年 11 月に公開した人工知能チャットボットで、生成 AI の一種である。

公開から僅か 2 カ月でアクティブユーザーが推定で 1 億人を突破し、世界に衝撃を与えたことは記憶に新しい。

生成 AI で生成できるものとしては、テキスト、画像、音声、音楽、動画などがあるが、ChatGPT はこのうちテキスト生成 AI に分類される。（23 年 10 月には有料版で画像生成サービスも開始）既に学習したデータを参考に予測した回答を返すのではなく、AI 自身が自ら学習し続け、人間が与えていない情報やデータをもインプットし、新たなアウトプットを返すことが可能となった。そのため従来より格段に精度が向上、ビジネス利用ができるレベルまで向上した点が注目を集めた。

この ChatGPT の登場により、関連するサービスが次々に生まれ、新たな市場を形成しつつある。

本稿ではその中から会話アプリ「AI チャットくん」、英語学習アプリ「スピーク」を取り上げる。

### 1. ChatGPT を身近にした LINE 会話アプリ「AI チャットくん」

「AI チャットくん」は「最先端の AI をマスに届ける」をミッションに掲げる株式会社 picon（本社：東京都渋谷区）が 23 年 3 月にリリース。僅か 8 カ月で登録者数が 260 万人（アプリ版も加えると 340 万人）を突破し、大きな反響を呼んでいる。

“本家”の ChatGPT は高精度で自然な対話ができる反面、公式サイトが英語、複雑な認証もあり、

日本人には利用するまでのハードルが高くなっている。そのため、小学生からシニアまで幅広い層に「最先端のチャット型 AI」を気軽に利用してもらいたいとの思いから開発に至ったという。

使い方は以下の通りで至って簡単である。

#### ① 友だち追加する

「AI チャットくん」の公式アカウントページにアクセスし、LINE に友だち追加する。

#### ② 文字入力で質問する

「トーク」をタップすると、「AI チャットくん」のトーク画面が開くので友だちに LINE をする要領で聞きたいことを入力すると、返答がある。

#### ③ 音声入力が可能

トーク画面のマイクアイコンをタップすると声の録音を開始し、録音した音声を送ると AI が音声データを解析し対話してくれる。（現在は有料プラン限定サービス）

質問は、「キーボードを開いて話しかける」をタップすると自由にできるが、別に用途に応じて 3 つのアイコンが用意されており、慣れるまではこちらから使ってみるとイメージしやすい。

#### ■ 用途別質問アイコン

		
<p><b>あなただけの話し相手に</b> 悩みを相談したり、宿題の手助けをしてもらう</p> <p>読書感想文を書いてもらう やる気が出ないと相談する しりとりをする</p>	<p><b>家事や生活のお手伝い</b> 考える家事のサポートや生活の知恵を聞いてみよう</p> <p>3日分の献立を作ってもらおう 今日の運勢を占う 子育てで相談してみる</p>	<p><b>普段の仕事のおともに</b> あなただけの秘書として活用して、仕事を効率化しよう</p> <p>お礼メールの作成 新規事業プレゼンの構成を作る ハッシュタグの提案</p>

出典：「AI チャットくん」LINE 版画面

主な質問内容は、メールなどのビジネス文書作成、献立レシピ、英語の添削、小説などの創作、子育ての相談、旅行計画の立案、話し相手としての利用が多いようだ。

登録者が50万人の時点でのユーザーの年齢層別利用率をみると、20代から40代が中心だが、50歳以上の層も14.5%を占めている。また、性別による差もそれほどなく、幅広いユーザー層が利用している様子が見えてくる。

利用料金は、毎日5通までは無料。月額980円/月、年額9,800円/年の有料プランに加入すると、無制限のチャットが可能になる。

23年11月からはLINE版、アプリ版に加えてSMS版の提供も開始。普段LINEを利用していない人やLINEの友だちを増やしたくない人にも対応し、さらなる利用者層の拡大を目指す。

## 2. AI英会話アプリ「スピーク」

16年に米国シリコンバレーで創業したSpeakeasy Labs社はOpenAI社から出資を受け、同社のChatGPTを始めとするAI技術を活用したAI英会話アプリ「スピーク (Speak)」を提供している。24年1月現在、韓国、日本、メキシコを中心とする中南米のスペイン語圏、台湾でサービスを展開中で、グローバル累計のダウンロード数は460万を突破、有料会員は10万人を超えている。

同社の強みは、自社開発の超高速かつ正確な音声認識技術と生成AI技術を掛け合わせ、会話に特化したレッスンを提供している点で、ヒアリングはできても話せない典型的な英語学習者のニーズに正面から向き合った点が受け入れられている。

スピークには、「レベル別コース」「AI会話」「ミニコース」の3種類のコンテンツがあり、どれも発話量が多くなるように設計されている。

「レベル別コース」は、お手本となる音声聞きながら、1つのフレーズを複数のパターンで何度も発話する練習を繰り返すもので、超初級から上級までの9つのコースがある。

「AI会話」は、「ホテルでのチェックイン」や「レストランでの注文」など、様々なシチュエーションにおける英語を実際にAI講師と会話しながら学んでいく。レッスン終了後には使用した単語の数やスコアが表示されるほか、発音や文法などに関して改善点がある場合にはAIからのフィードバックももらえる。

### ■ 「AI会話」画面イメージ



出典：Speakeasy Labs社 リリース

「ミニコース」は、会議で多用される表現や英語独自の言い回しなど決まったフレーズやテーマを短時間、ピンポイントで学ぶ。

料金設定は、「プレミアム」(年間12,800円、月額1,800円)、「プレミアムプラス」(年間29,800円、月額4,000円)、「プレミアムアンリミテッド」(年間44,800円、月額6,800円)の3種類がある。いずれも「レベル別コース」と「ミニコース」は無制限で利用できるが、「AI会話」の利用量に差がある。

今後は、既存の英語学習サービスとの競争が激しくなることが予想されるが、同社はOpenAI社とのパートナーシップにより、最新AI技術をいち早く自社のプロダクトに組み込める利点を活かし、競争に勝ち抜く構えだ。

資産運用業界に新風を吹き込む「SBIラップ」

日本では2016年ごろから証券会社などがAIを活用して、投資診断や投資アドバイス、運用などを行うロボアドバイザーサービスが始まっている。

ロボアドバイザーには、投資家に対して最適な資産配分などについて助言だけを行う「アドバイス型」とロボアドバイザーの提案内容を了承すれば、手数料は掛かるが、運用も含めてすべて任せられる「投資一任型」の2種類がある。

株式会社SBI証券が22年3月に提供を開始した「SBIラップ」は「投資一任型」であり、開始1年半で資産残高が600億円を突破するなど人気を博している。

## 1. 若年層を中心とした顧客の拡大へ

当サービスは、AIを活用した運用商品の開発実績がある株式会社FOLIOとの共同開発によるもので、FOLIOが投資判断を行い、顧客とFOLIOの投資一任契約の代理や、顧客のSBIラップ専用口座における投資信託の売買注文などの管理をSBI証券が行っている。因みに“ラップ”とは、複数のファンド（投資信託）を組み合わせることを表している。

SBIラップの特徴は次の通りである。

### ① AIにお任せの“ほったらかし運用”が可能

AIがマーケットの状況を分析しながら、「危機察知」「景気動向の予測」「金融市場の予測」を行う。相場を先読みしたりリスクコントロール型の自動投資配分によって、相場が不安定な近年においても良好な運用実績を示していて、投資成績の向上を期待する、特に資産運用未経験者・初心者の多い若年層の需要を捉えている。(過去10年間、SBIラップの運用戦略に基づき投資を行っていたと仮定したバックテストの結果は図表のとおり)

■図表 「SBIラップ」過去10年間のバックテスト



出典：SBI 新生銀行 HP

### ② 魅力あるポイントプログラム制度

SBIラップでは、「SBIラップマイレージ」というポイントプログラムが用意されている。月間運用平均資産額に応じてポイントが付与されるもので、選択できるポイントもTポイント、Pontaポイント、dポイントなど6種類が用意されている。

これにより年率0.660%（税込）かかる手数料コストを実質的に下げることができる。

### ③ 最低投資額1万円から口座開設が可能

ファンドラップを対面型で利用する場合、通常最低投資額は300万円からと、かなりハードルが高いが、SBIラップでは1万円から運用を始めることができる。

## 2. 今後の見通しと対応

ロボアドバイザーの先進国であるアメリカでは資産運用市場に占めるロボアドバイザーの割合が年々増加し、日本でも同様の傾向がみられる。

AI技術の進歩も予測され、これによりロボアドバイザーがより高度な予測と分析を行えるようになるに違いない。投資家の需要もコスト削減と効率向上を求めてロボアドバイザーに向かう可能性は高く、SBI証券では今後も投資家に多様な選択肢を提供するとともに、現在は利用できない新NISAへの対応も検討していくとしている。